



Title	勝海舟が「海外の一知己」丁汝昌
Author(s)	福井, 智子
Citation	大阪大学言語文化学. 2004, 13, p. 35-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77927
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

勝海舟が「海外の一知己」丁汝昌*

福井 智子**

キーワード：勝海舟、丁汝昌、日清戦争

明治 24 (1891) 年 7 月, 清政府北洋海军访问日本。当时的北洋海军因拥有德国制造的定远、镇远舰为主力的大舰队, 而享誉“亚洲最强”的盛名。为此, 很多日本人对北洋海军的来访表示出极大的关心。其中尤其引人注目的是北洋海軍の提督丁汝昌。这位勇敢且具有军事才能的将领, 因深得李鸿章的信任, 自然使得日本政界及学术界的人士都愿意与丁汝昌结交。胜海舟也是在此次初识丁汝昌。

胜海舟与丁汝昌的交往较之其他日本人显得尤为特殊。胜海舟不仅在江户幕府中最早主张建立海军并为海军的创立竭尽全力, 还从江户后期到明治初期在海军中担任重要职位。为此, 尤其博得了丁汝昌的尊敬。在定远舰上举行的晚会上, 丁汝昌将当时在野的胜海舟作为海军提督来接待的事实, 足以看出丁汝昌对胜海舟的敬仰程度。为丁汝昌的态度所感动, 胜海舟与丁汝昌之间建立了超越政治与外交之上的深厚友谊。

明治 24 年的北洋海军访日, 在日本人中留下了深刻的既感到威胁又感到羡慕的复杂的印象。

明治 27 (1894) 年, 朝鲜爆发了东学党起义。清政府应朝鲜政府请求, 派兵赴朝。此时, 为了修改与欧洲各国之间的不平等条约及扩大在朝鲜的势力, 日本政府也派军到朝鲜。为此, 在日中两国之间爆发了甲午战争。与日益发展壮大的日本海军相比, 北洋海军已经数年未新增一艘军舰, 而且定远、镇远舰的速度也下降。丁汝昌虽始终坚持苦战, 但因丰岛海战、黄海海战损失惨重, 只得率北洋海军退守威海卫。在威海卫战役中, 虽然受日军海陆围攻, 丁汝昌仍坚持抵抗, 终因在等待救兵无望、坚决拒绝日军劝降及部下的威逼下, 丁汝昌服毒自杀。

接到丁汝昌的讣闻, 许多日本人在感到悲哀的同时对丁汝昌的对清政府的忠诚大加赞赏。当时在日本, 许多哀悼丁汝昌之死的诗歌诞生。胜海舟也创作诗文表达了对丁汝昌之死的哀痛之情。然而, 海舟的哀悼之情不同于他人, 相同的创

* 胜海舟の“海外一知己”——丁汝昌 (福井智子)

** 大阪大学言語文化部非常勤講師

建海軍和統領部下の経験、使得海舟更能深切体会丁汝昌作为统军人物的苦恼。

正是这种对丁汝昌的理解及情谊才使海舟将丁汝昌视为“我的海外一知己”。

1. はじめに

本論文は、日清戦争の終盤に日本軍に追いつめられ、降伏を拒んで自殺した清国海軍提督・丁汝昌について、丁との間に個人的な面識を持った勝海舟の言動を追うものである。この中では、これまで歴史学等で断片的にのみ語られてきた日本人の丁汝昌観を、勝海舟の視点を中心に、明治24年の日本訪問時の新たな資料を交えて再確認していく。またここでは当時の社会的、文化的背景を考慮し、従来、あまり触れられることのなかった海舟や丁汝昌の漢詩にも注目し、その制作背景を検討する。一般に日本における漢詩制作の習慣は、清国との交通が開け、両国人士の往来が頻繁となった明治期に質量ともに最盛期を迎え、日清戦争以後、急速に衰えたと言われる。海舟らの詩のやり取りは、そういった近代日本漢詩の一側面を表すものと言える。そしてこれらの作業を通じ、丁汝昌の訃報に接した時、すぐさま丁汝昌を自らの「海外の一知己」と称して憚らなかった海舟の心情を考察する。

2. 北洋艦隊の日本訪問

明治24年(1891)7月、清国の北洋艦隊が日本を親善訪問した。定遠、鎮遠、経遠、来遠、致遠、靖遠の六軍艦から編成された北洋艦隊は、約一ヶ月にわたって長崎、神戸、横浜、そして宮島等を順に寄港して回った。清国政府が誇る精鋭の軍艦の訪問とあって、日本中が高い関心を示したことは言うまでもない。例えば各新聞が連日のように北洋艦隊の動静を詳しく報じた様子からも、当時の盛り上がりぶりが容易に想像される。中でも定遠号に乗船した提督・丁汝昌は、ひときわ多くの注目を集めた。丁汝昌の人物性、及び風貌は、その多くが以下のような賞賛をもって報じられた。

◎丁汝昌氏の服装及容貌

同氏の着服は軍服にあらずして通例の支那服なり帽子は普通支那人文官の冠し居るものなり上部に至りて広がり上に赤色の綵を付け其上に種種の飾玉を附けたる礼帽なり年齢五十二三にして長け高く色黒く自から提督たるの風采を備へ居れりと云ふ

(『東京日日新聞』明治24年7月7日)

◎丁汝昌氏 ていごしょうし は安徽省蘆州あんきせうろしゅうの人也、人と為り活達ひとくわつか 大度初め淮軍ママに属し李中堂つたいどに随わいぐんひ長髪族を征し又捻子族を討て功有り擢んでられて直隸天津鎮總兵りちうたうとなり尋で北洋水ちよくれいてんしんちんそうへい

師総領に補す朝鮮の乱に際し又之を征して功有り遂に北洋水師提督に任ぜられる実に明治二十一年十二月十七日なり氏支那海軍の振はざるを歎じ自ら歐洲に行きて視察する処あり帰つてその擴張に従事する事十年釐革の功頗る揚る李中堂大に其才を愛し部下及び一般軍属も亦た其風采を欽望すると云ふ今年四十五六

(『国民新聞』明治24年7月9日)

北洋艦隊にとって今回は二度目の訪日であった。一度目は明治19(1886)年の8月、ウラジオストックからの帰途、艦船の修理の為と称して長崎へ入港した。しかしこの時は不幸にも上陸した清国の水兵と日本の警察の間で乱闘が起こり、80人あまりの死傷者を出す大事件(「長崎事件」)が勃発する。当然、日清両国の関係は一時期、極めて困難な状況に陥った。当時、北洋艦隊に乗船していた外国人顧問の中には、事件を口実に日本に宣戦布告するように丁汝昌に勧めたものもいた。しかし国際法の下で解決を図るべきと考えた丁は、そういった意見を却下したと言う¹⁾。結局、英・米人の顧問を含む談判の為に委員会が設立され、およそ半年かかって事件はようやく解決へと至った²⁾。このような経緯もあって、今回の訪日では清国水兵の上陸、及び日本側の警備には、双方ともに細心の注意が払われた³⁾。

7月初旬より本格的に日本巡回を開始した北洋艦隊であったが、各地で在留清国人はもちろんのこと、日本の政治家、学者たちからも盛大な歓迎を受けた。丁汝昌と六艦隊の艦長達はこの訪日中、丁の明治天皇への謁見をはじめ、各方面の要人訪問、市街や大学、また軍港等の視察、そして名勝見学といった日程をこなした。それと同時に各種の祝宴に招かれ、また自身らも招く側となって、多くの日本人と社交を繰り広げた。最新鋭の軍艦を率いてやって来た有能な軍人・丁汝昌と面識を持つことは、当時の政界、及び学界関係者の、甚だ望むところであったに違いない。勝海舟もこの時に初めて、丁汝昌と出会う機会を持ち得た一人であった。しかも海舟は他の日本人とは異なり、両国の政治や外交の枠を超えた所で、丁汝昌とより個人的な友情を築くにまで至る。当時、海舟は六十九歳、丁汝昌は五十五歳であった。

3. 勝海舟と丁汝昌の交流

丁汝昌を「おれが海外の一知己だ」(『氷川清話』「丁汝昌」)と言った勝海舟には、訪日中の丁汝昌とは公私を交え、少なくとも四回面会する機会があった。まず公のもので

¹⁾ 賈熟村「丁汝昌」『淮系人物列伝』pp.276-277.

²⁾ 野村實『日本海軍の歴史』(吉川弘文館 2002)「一 日清戦争」p.41 参照。

³⁾ 例えば『東京日日新聞』の北洋艦隊関連の報道の中に、「警察本部の注意、署長の訓示」(7月3日)、「支那水兵上陸に就ての打合せ」(7月4日)、「支那水兵の上陸について」(7月17日)等の記事が見られる。

は、7月10日の昼、榎本外務大臣主催の後樂園での園遊会、及び同日の晩に芝の紅葉館で行われた亜細亜協会主催の懇親会、そして14日に丁汝昌らが在朝在野の貴紳ならびに新聞記者たちを定遠号に招いた懇親会がそれである。10日に行われた各会での詳細は不明であるが、7月16日付けの『国民新聞』は、定遠号での懇親会で丁汝昌が海舟を「海軍大将の礼で以て」迎えたと報じている。また海舟の日記の7月9日の項に、「清国海軍惣提督丁汝昌、種々話談」⁴⁾とあり、私的な面会の機会があったことがここに確認される。

ところで当時の日本では今とは違い、知識人の間では漢詩文の教養が重要視されていた。とりわけ清国からの高級官僚の来日に際しては、詩文をもって交友関係を結ぶことが知識人達の常であった。アジア屈指の軍艦として注目を集めた北洋艦隊のメンバーに対してもその例外ではなかった。例えば芝の紅葉館での懇親会を報じる記事には、「詩文の酬唱頗ぶる多く」（『東京日日新聞』7月12日）の一文が見える。また後樂園の園遊会に招かれた依田学海の場合は、かねてから準備していた古詩「贈大清国水師提督禹亭丁公」を送った⁵⁾。学海は丁汝昌が先に長髪族を平定し、また朝鮮の内乱を鎮静させた功績を称え、「嘗て伝ふ緑林を剪すと、更に聞く麗朝を服するを」という句を詠んだと、日記中で述べている⁶⁾。後に取り上げる海舟の詩も、こういった社会的教養の中で制作されたものと捉える必要がある。

さて定遠号での懇親会であるが、これは丁汝昌ら北洋艦隊側が日本で様々な歓迎を受けた事に対し、その返礼の意を表して開催したものであった。もちろん北洋艦隊側にとって、自らの艦隊に多くの日本人を招くことは、一種の示威行為でもあった。前後二回に分けて行われたこの懇親会には、まず14日に貴顕紳士と新聞記者が、そして16日に両院議員がそれぞれ横浜港に停泊する定遠号へと招待された。勝海舟は宮島誠一郎とともに、14日の懇親会に出かけていった。

先述した通りこの日の海舟は、丁汝昌から礼を尽くしたもてなしを受けただけではなく、親密に意見を交換する機会もあったと見られる。「勝伯、海軍大将の礼を以て待たる」の見出しをつけた『国民新聞』（7月16日）は、その時の様子を以下のように伝えた。

衆賓 悉く散じ跡に残るは勝安芳伯及び宮島誠一郎氏二人のみ、伯、丁と臂を把て談ず
 一見猶ほ旧識の如きものあり、伯將に艦を辞せんとするや、彼送るに海軍大将の礼を以てす、
 奏楽何ぞ清き、祝砲何ぞ壮なる、殊に小蒸気船を仕立てて伯を送り還せしは正
 に午下四點鐘の頃なりけり、謂ふべし勝伯も亦榮なりと

⁴⁾ 本文で引用する海舟の日記は、『海舟日記II』（『勝海舟全集』第二十一巻 勁草書房）を定本とする。

⁵⁾ 『国民新聞』明治24年7月12日

⁶⁾ 『学海日録』明治24年7月10日。なお明治24年7月12日付けの『国民新聞』の記事では、引用箇所
 の二句目が「尋聞服麗朝」となっている。

完全に野にあった勝海舟が、こういった例外的に丁重なもてなしを受けた背景には、主として二つの要因が挙げられる。まず一つは、海舟の日本海軍における実績である。海舟は早くから日本にも海軍が必要だと考え、幕府の海軍事業に深く携わった。例えば、咸臨丸で初めての海外航海を行い、また神戸に海軍操練所を設立し、人材の育成に尽力したこと等がそれである。官僚としても海舟は、軍艦奉行並、軍艦奉行、そして海軍奉行並といった幕末の海軍の最高幹部を歴任、さらに明治に入ってから参議兼海軍卿の役（明治8年まで）を務めた。幕末から維新时期、そして明治初期にかけての日本海軍創設に、海舟の果たした役割は大きかったと言える。こういった海舟の経歴に、当時、清国海軍を統率する丁汝昌は深く共感を示した。私的な面会の際に、丁汝昌が海舟に語ったと言われる以下の談話は、同じ苦労を経験した者への飾らぬ告白であった。

今日我国の海軍は、いかにも見所がなく、お恥かしき次第だが、拙者はたゞ将来に期すところがあつて、いさゝか自から奮励して居るばかりだ。拙者はかつて、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて英国へ留学し、同国の士官に就いて、少しく海軍のことを学び、帰朝の上、この二百名の生徒と共に、やうやう今日の海軍を創設したけれども、これはたゞ見聞に過ぎない。その事は李氏も承知と見えて、今日の海軍は、何の役にも立たない、たゞ今後十年を期して、大成すべきのだが、今日あるのは、その時の基礎とするにも足らないと、常々われわれに言うて居る。…（『氷川清話』『丁汝昌』）⁷⁾

またこの時、海舟の著書である『海軍歴史』を愛読していた丁は、「うたゞ同情の感に堪へず、切に敬慕致し居る」と、その感想を述べたという⁸⁾。

それから海舟と丁汝昌を直接結び付けるのに一役かった人物として、この日行動を共にした宮島誠一郎が注目される。宮島はもともと米沢藩の士で、漢学の素養があり、藩校興譲館の助教を勤めた経験を持つ人物である。政治への関心も強く、戊辰戦争期には藩と新政府の間を奔走した。維新後は、独自に清国公使館との間に人脈を作り、多くの日本の要人を紹介したことで知られる。明治期の海舟の中国観、アジア認識の形成に、この宮島の影響は大きい⁹⁾。

上記のような丁汝昌の接待に対する海舟の反応であるが、まずその日記を見ると、「横浜清艦行。接待甚だ厚情」（明治24年7月14日）とあり、満足の意が示されていた。ま

⁷⁾ 江藤淳、松浦玲編『氷川清話』（講談社学術文庫）（講談社 2000）、pp.139-140。以下、本文で引用する『氷川清話』は、本書を底本とする。

⁸⁾ 海舟の『海軍歴史』は漢訳され、主として朝鮮や中国の知人に配られたという。（勁草書房版『勝海舟全集』第十三巻「解題」参照）

⁹⁾ 松浦玲『明治の海舟とアジア』（岩波書店 1987）pp.16-17,114。

た先に取り上げた『国民新聞』も、海舟がかつて海軍創設に関わった体験をもってして、丁汝昌と北洋艦隊をほとんど手放しに称賛した様子を報じた。

見ない内はナーンにと思ふて居たが来て見れば所謂百聞一見に如かずで今度ばかりはびっくりしたよ、アノ艦は善いねー中々善い艦だよ、新聞屋なんぞは櫓一ツ漕いだことの無い先生達だから艦の善悪などは分かるまいがマーマー善くアー云ふ艦を見て置いて世の中の惰眠を警醒しなくチャーいけないよ… (『国民新聞』7月16日)

さらに日清戦争終盤にも、海舟は再度、当時の印象を以下のように語っている。

その後、軍艦に招かれて、提督の礼で待遇せられ、いろいろ丁寧な饗応を受けたが、(中略)そして艦内残る限なく見物したが、一体の事もなかなか整頓して、日常用ゐる品などは、一つも外国製のを用ゐず、支那製ばかり用ゐて居たところなどは、実に感心したヨ。軍服なども、西洋服と支那服とを折衷したのだといつて、丁は自分の着けて居るのを指し示した。 (『氷川清話』「丁汝昌」)¹⁰⁾

北洋艦隊自体は最新鋭の戦闘能力を備えた、つまり完全に西洋化された艦隊であった。一方、それを扱う人員たちは、かえて比較的質素な国産品を身邊に用いていた。上記の談話は、海舟がこの点に痛く感心した様子を伝えている。

ところでこれら一連の談話であるが、それが新聞報道だった為に、海舟の真意をどの程度反映したものかは、常に考慮する必要がある。しかし国を挙げての西洋化、そしてアジア軽視の姿勢に傾く時流に警鐘を鳴し続けた海舟の姿は、さほど歪められていないであろう。外観はどんなに西洋化しても、精神面では東洋主義を貫く北洋艦隊の姿勢に、海舟はある種のすがすがしさを伴った、自らの理想的近代化の姿を見ていたと言える。

同艦には十六日、帝国議會議員の一人として外山正一も訪れていた。外山はこの時、清国軍艦の堅牢で高水準の性能を備えた姿に感服しながらも、同時に水夫たちの志気の低さを感じていた¹¹⁾。また呉を訪れた北洋艦隊を見学した東郷平八郎も、水兵の訓練が劣っていることを見抜いたと言われる¹²⁾。外山、東郷に比べ、海舟の一連の印象はいささ

¹⁰⁾ 前掲、『氷川清話』「丁汝昌」、p.140.

¹¹⁾ 外山正一「社会学上の問題」(明治23年12月)『>山存稿』(丸善株式会社 1909)には、以下のような記述が見られる。「私に於ては東洋に此位の軍艦が出来東洋に此位の仕官を以て備へたる所の艦隊の出来たと云ふは実に欣ばしいことと思ひました、然るに此時少し遺憾に思ひましたのは其水夫の有様であります水夫は大概はどうも其人に充分氣力がないうに見えます、(中略)総て此水夫の有様は私には聊か不完全であろうと思はれました…」

¹²⁾ 前掲、『日本海軍の歴史』、pp.41-42.

か好意に傾いた嫌いがある。おそらく海舟の北洋艦隊に対する好評価は、その東洋精神重視の姿勢と、そして何にもまして、丁汝昌との間に築かれた個人的な友情に依るところが大きいと言える。

定遠号の雄姿への感動、そして丁汝昌との友情に対する感激の意を、海舟は丁に自作の和歌と漢詩を贈ることで示した。和歌については後に、「…軍艦に招かれて、いろいろ丁寧な饗応を受けたが、おれは一片の氷心を表はすために、一首の和歌を一口の宝剑に添へて彼に贈った。」(『氷川清話』「丁汝昌」)と述べたが、漢詩にはどこにも言及が見られない。今、ここで取り上げる作品は共に、『国民新聞』(明治24年7月16日)掲載のものである¹³⁾。

水やそらよしやくぬちはへだつとも

此交りを忘るなよ君

鉄艦数百尺。逐鯨大東洋。握手煙波裏。我望隣誼祥。

(鉄艦数百尺。鯨を大東洋に逐ふ。手を握る、煙波の裏。我は望む、隣誼の祥を。)

「文学が嫌いだ」、「詩も、歌もでたらめだ」(『氷川清話』「文字が大嫌ひだ」)と自ら述べた海舟であるが、その和歌、漢詩は往々にして文学的規則に反し、かつ字句の洗練を欠いた。上記の漢詩なども、そういった海舟の文学観、及び姿勢を反映した一例と言える。しかし両作品の眼目は、海を隔てた隣国同士がこの時の海舟と丁汝昌のように、未永く友好関係にあることを願う気持ち、そして西欧列強に共に立ち向かおうという呼びかけであり、それらは至って素直に表現されている。

同紙はまた、丁汝昌が亜細亜協会主催の懇親会上で披露した漢詩も併せて紹介した。当時の高級官僚一般に言えることであるが、禹廷・雨亭の雅号を持った丁汝昌までも、剛直、豪快なだけの軍人ではなかった。千年以上の昔から両国で共有された文化背景に基づき、丁汝昌は今後の日清関係について以下のように述べた。

足跡縦横半地球	足跡 縦横 地球に半す
環観望気数吾洲	環観 望気 吾洲を数ふ
三山漢代称仙窟	三山 漢代 仙窟と称し
九有虞廷是帝邱	九有 虞廷 是れ帝邱

¹³⁾ 現在、刊行されている『勝海舟全集』(講談社版、勁草書房版)には、この時の作品はともに収録されていない。なお、新聞に掲載された漢詩の訓読は筆者による。

同合車書防外侮	共に車書を合はせて外侮を防ぎ
敢誇砥柱作中流	敢へて砥柱の中流に作すを誇らん
我来偶遇修和日	我来たり偶たま遇ふ 修和の日
共上芝山聴古謳	共に芝山に上りて古謳を聴かん

内容は次のようである。軍艦に乗船してこの方、その「足跡」は「縦横」南北、東西へと赴き地球半周に達した。「環観」各地を視察し、「望氣」その地の現状と将来を展望して回る行程の中には、「数吾洲」あなた方の日本も含まれていた。蓬萊、方丈、瀛洲の「三山」からなる日本は、「漢代」に「仙窟」神仙の住む所と称され、一方の「九有」清国は、「虞廷」古代の聖王・堯の御代には既に、「帝邱」皇帝を中心とした統一国家を形成していた。さて今日の日本と清国であるが、「車書」車の両輪の幅と文字をそろえて一つとなり、「外侮」西欧列強の侵略を是非とも防ごう。そして国際社会の中で、あの激流中にそそり立つ山「砥柱」のように毅然と立ち向かっている姿を、あえて誇ろうではないか。私、丁汝昌は、「修和日」両国の関係が友好であるこの日に、訪日する機会を得た。清国、日本両国の人員でここ「芝山」芝の紅葉館の丘に登り、「古謳」互いの文化が共有してきた古の詩に耳を傾けよう、と。海舟の詩歌と同様、丁汝昌の詩もまた、日清間の友好と西欧列強への両国による対抗姿勢を高らかに詠うのであった。

明治24年の北洋艦隊の訪日は、両国人が互いに親しく言葉を交わし、また詩を贈るといった伝統的な文芸上の交流を通じ、終始、和やかな雰囲気の中で進行した。そこに国際政治上の関係を考慮した上での、儀礼的交流も多々あったことは否めない。しかしその中でも、政治や外交に囚われることなく、真に互いへの敬意を深め合い、友情を抱くに至る者達も少なからず存在した。海軍の創設と統率における苦労を共感できる海舟と丁汝昌は、その一例だったと言えよう。

ともあれ北洋艦隊と丁汝昌は、多くの日本国民に脅威と羨望の入り交じる記憶を残し、およそ一ヶ月後に日本を去った。再びこのアジア屈指の艦隊と軍人に日本中の高い関心が集まるのは、数年後に起こった日清戦争とその悲しい結末の為であった。

4. 丁汝昌を悼む勝海舟の詩と談話

明治27(1894)年、朝鮮で農民の反乱を主体に東学党の乱が起こった。朝鮮政府は清国に対し、すぐさま援軍の派遣を求めた。この時、欧米諸国との条約改正と朝鮮を勢力圏に取り込むことを目指した日本は、居留民の保護を名目に出兵することを決定する。これが日清戦争の始まりであった。

勝海舟は、日清戦争に対して最初から反対であった。海舟の対アジア政策への主張は、

幕末から一貫している。日本はやみくもに欧米の列強にならない、清国や朝鮮といった隣国を侵略してまで近代国家になる必要はない。むしろアジア諸国同士で手を取り合い、欧米諸国への対抗勢力となるべきではないか、というのが海舟の主張であった。このあたりの事情については、松浦玲氏の著作『明治の海舟とアジア』中の「日清戦争反対論」¹⁴⁾が詳しい。松浦氏も同書の中で紹介しているが、以下の漢詩は、日清戦争に真正面から反対の意を唱えたものとして注目される。

偶感 二十七年作

隣国交兵日	隣国 兵を交ふるの日
其軍更無名	其の軍 更に名無し
可憐鶏林肉	憐むべし 鶏林の肉
割以与魯英	割きて以て魯英に与ふ ¹⁵⁾

「鶏林」とはもともと新羅の別称で、朝鮮全体のことを指す。詩の主眼は、第二句目の「其の軍 更に名無し」である。これは日本が朝鮮政府からの要請がないにもかかわらず、その内乱に乗じて無理やりに兵を送り、清国との戦端を開いたことを批判する。既に宣戦の勅書が出ていた時期だった為に、向山黄村は海舟に対し、名分の無い戦争と非難する詩を作るのは良くない、と忠告した。しかし海舟自身は、全く平気であったと言う¹⁶⁾。また第四句目の「割きて以て魯英に与ふ」は、「英」が「独」と「仏」に代わるものの、朝鮮に対する日本の勢力増大を阻んだ、三国干渉を予感させるものであった。

日清戦争は近代的な軍備を備えた日本軍によって、終始有利に展開された。数年前、北洋艦隊の雄姿に圧倒された日本であったが、この時には定遠、鎮遠の速力を遙かに上回る快速艦を配した連合艦隊を結成し、陸軍力のみならず、海軍力でも優に清国を引き離す体勢を築きあげていた。一方の清国海軍は、作戦指導・艦隊装備の不統一等の問題もあって、開戦の動機となった豊島沖海戦、及び黄海海戦でも共に日本海軍に破れ、旅順、そして威海衛へと逃れることを余儀なくされる。そして明治28年2月、連合艦隊はここ威海衛で北洋艦隊に対し、水雷艇を用いて壊滅的な打撃を与える。最後まで奮戦し、降伏を拒んだ丁汝昌が自殺、日本は勝利を確実とした。そしてその後はアメリカ政府の仲裁により、下関での日清講和条約の調印に至るのであった¹⁷⁾。

¹⁴⁾ 前掲、『明治の海舟とアジア』、pp.154-174.

¹⁵⁾ 以下に引用する勝海舟の漢詩は、講談社版『勝海舟全集』第二十巻を定本とする。訓読は著者により、一部改めた。

¹⁶⁾ 前掲、『氷川清話』「おれは大反対だったよ」、p.270.

¹⁷⁾ 前掲、『日本海軍の歴史』、pp.40-46.

丁汝昌の訃報に接した海舟は「今昔の感に堪」えず、「平仄などは、無茶だヨ」（『氷川清話』『丁汝昌』）と言いながら、すぐさま一首の漢詩と追悼文を作ってその死を悼んだ。以下に示すものは、その時の漢詩である。

二月十七日、旧知の清国水師提督丁汝昌自殺の訃報を聞く。我深く君の心中の果決無私なるに感じ、亦た従容として其の死期を誤らざるを嘉し、嗟嘆すること数時、蕪詩を作りて其の幽魂を慰めん。

憶昨訪吾廬	憶ふ 昨 わが廬を訪づ
一劒表心裏	一劒 心裏を表す
委命甚誠忠	命を委 ^す つるは 甚だ誠忠なり
儒者聞之起	儒者 之を聞かば起きん
聞君識量洪	聞く 君が識量 洪くして
万卒皆遁死	万卒 皆 死を遁るるを
心血濺渤海	心血 渤海に濺ぐも
美名照青史	美名 青史を照らさん

第一、二句では、明治24年の訪日の際、海舟と丁汝昌が親しく交流した事に触れる。丁がわざわざ海舟宅を訪れたこと、また定遠号を見学した時には手厚いもてなしで迎えてくれたことに報い、海舟は丁に宝劒を贈った、と。第三、四句は、丁汝昌が「委命」自らの死をもってあくまでも母国に忠誠を示したことを賞賛し、またその姿には、とかく「儒者」おくびょう者と罵られた清国兵でも振るい起てられたであろう、と言う。詩の後半部では、丁汝昌の提督としての正しい判断が、結果的には多くの清国兵士の命を救った事実（第五、六句）、そしてその死は今後の歴史に刻まれていくであろうという自らの思いを綴った（第七、八句）。

海舟はまた丁汝昌の死に触れた談話の中で、丁の最期を、「実に戦闘力を失った艦長が取るべき模範を示したばかりではなく、蕭条たる海戦史の秋の野に、一点の紅花を点じたのだ」と評した。これは、上記の詩の第三句から最後にかけての部分とほぼ同じ内容と言える。更に同談話では丁の境遇について、以下のように詳細に語ったのであった。

部下には数年来苦心養成したところの、他日支那海軍の要素たるべき彼の二百名の秀才があり、傍にはいろいろ面倒な事をいひ出す雇外人があり、これらの処置をつけねばならぬ。むしろ斃れるまで奮戦せうかといふと、十年素養の二百名を殺さなければなら

ず、それでは降参せうかといふと、自分の良心はどうしても許さない。そこで丁は沈思熟考、支那海軍の将来を慮り、自分の面目をも立て、かつは雇外人への義理から、一身と軍艦とを犠牲にして顧みなかつたのだ。その心の中は、実に憫むべきではないか。(『氷川清話』「丁汝昌」)¹⁸⁾

丁汝昌は多くの面で、悲運の提督と称される人物であった。まず丁は、いかなる作戦を行うにしても北京政府の指示を仰ぐ必要があったが、その政府の首脳達は皆文官で、戦況に全く理解がなかった。その為、丁汝昌と政府側の意見がたびたび食い違う。そしてやむを得ず丁が政府の指示に従った為に、結果的に清国軍を不利な状況に追い込むことになる、その責任は丁に負わされるのであった¹⁹⁾。母国への真の忠誠心をもって戦場に立つ者の実情が、戦場を経験しない政府首脳部に理解されない虚しさと悲しみ。かつて江戸幕府の崩壊に際して、徳川家の存続と全国の武士たちの行く末を案じ、新政府と命がけの交渉にあたる中、たびたび孤立無援の状況に追い込まれた海舟には、身に覚えのある経験であったと思われる。また明治の今、伊藤博文や陸奥宗光といった後進の主導のもと、西欧諸国型の近代国家を目指してひた走る日本に対して、海舟は一抹の不安を感じていた。そこでかつての政治経験をもって、海舟は日清戦争反対論に代表される警告を繰り返すものの、政府中枢外にある今、さして大きな影響力となれないのが実情であった²⁰⁾。自らの経験と能力を信じてつつも、それらを生かすことの出来ない今の立場がまた、戦場での丁汝昌の苦悩を海舟には、より一層身近に感じさせたと思われる。

丁汝昌の最期は、当時の日本人の心中に多くの悲哀と賞賛の感情を掻き立てた。各新聞は一樣にその死を悼み、且つ「嗚呼丁汝昌は実に殉国の烈士なり」(『朝野新聞』)とその死を深く讃えた²¹⁾。また軍医として日清戦争に参戦した森鷗外には、丁汝昌の故宅を訪れた時の感慨を詠んだ、「軒近くさくやかたみの梅の花 あるじのしらぬ春に逢いつゝ」をはじめとする三首の歌がある。樋口一葉は、「丁汝昌か自殺はかたきなれともいと哀也さはかりの豪傑をうしなひけんと思ふにうとましきはたゝかひ也」といった反戦の意を含んむ詞書きを持つ、「中垣のとなりの花の散るミても つらきは春のあらし成けり」の歌を詠んだ。この他にも、丁汝昌の奮戦振りや悲壮な最期を称える演歌が誕生している²²⁾。

¹⁸⁾ 前掲、『氷川清話』「丁汝昌」、pp.141-142.

¹⁹⁾ 前掲、『丁汝昌』『准系人物列伝』、及び、小笠原長生「丁汝昌が悲壮の最期」『小笠原長生全集』(平凡社 1936) 参照。

²⁰⁾ 前掲、『明治の海舟とアジア』「日清戦争反対論」、pp.158-167.

²¹⁾ 「丁汝昌の自殺と諸新聞」『日清戦争実記』第二十一編(博文館 明治28年3月17日)

²²⁾ 以上は、清田文武「森鷗外の丁汝昌を悼む歌」『解釈』1. 2月号(第46巻)(解釈学会 1999年2月)を参照。

海舟の丁の死に対する反応は、一見すれば、当時の社会一般の一反応だったと言えるかもしれない。しかし鷗外、一葉を除けば、戦勝国としての余裕から敗戦の将を称える嫌いが有った世間のそれとは異なり、海舟の場合は死者へのより深い理解を伴った。これは個人的にも面識があり、更に海軍創設とその統率への苦労を介して結ばれた丁との友情の為である。友情といえば、日本海軍の最高指揮官であった伊東祐亨が丁汝昌に降伏を勧めた際に見せたやや古風な武士の友情も、江戸時代の気風を引き継ぐこの時代特有の精神として特筆される。実際に丁と干戈を交えることは無かったものの、海舟も武士階級の出身である。伊東と同様の感情は当然、海舟の胸の内にも存在した。上記の丁を悼む漢詩などは、この種の友情に沿って作られものと言える。しかし海舟の丁汝昌への友情は、これだけには収まらない。明治24年の北洋艦隊の訪日の際に、野にあった海舟を「軍艦提督の格を以て」もてなした丁汝昌の心遣いは、その後の詩や談話の中で繰り返されているところからも、よほど海舟を喜ばせたと見える。異国の現役提督から受けた対等者としての応対に、海舟は「国家の大事に逢へばまだやるさ」（『氷川清話』「果たして李に上を超された」）と言う自信と共に、丁との間に同業者として共有できる責任感を再認し、そしてそこに親近感を強く抱いたのである。丁の死に触れた談話は、この線上に位置づけられる。海軍を一つの必要不可欠な国家事業と見なし、その創設および統率の苦労を分かち合え、尚且つ孤立無援下の苦い体験も共に経験したという点では、これは同志的友情と言えよう。国家の命運を我が身と海軍事業に託された者同志という強烈な意識こそ、海舟をして丁汝昌を「海外の一知己」と称させたものと思われる。

《主要参考文献》

- 江藤淳・松浦玲編『氷川清話』（講談社学術文庫）（講談社 2000）
- 小笠原長生「清国北洋艦隊の戦況」「丁汝昌が悲壮の最期」（『小笠原長生全集』第七巻）（平凡社 1936）
- 勝部真長編『氷川清話』（角川ソフィア文庫）（角川書店 1972）
- 清田文武「森鷗外の丁汝昌を悼む歌」『解釈』1. 2月号（第46巻）（解釈学会 1999）
- 徳富蘇峰『勝海舟伝』（『偉人傳全集』第七巻）（改造社 1932）
- ドナルド・キーン「日清戦争と日本文化」『日本人の美意識』（中公文庫）（中央公論新社 1999）
- 野村實監修『図説 日本海軍』（河出書房出版 1997）
- 野村實『日本海軍の歴史』（吉川弘文館 2002）
- 松浦玲『明治の海舟とアジア』（岩波書店 1987）
- 松浦玲『還暦以後』（筑摩書房 2002）

『学海日録』第八卷（岩波書店 1991）

『日清戦争実記』第二十一編（博文館 1895）

贾熟村「丁汝昌」『淮系人物列传』（黄山书社出版 1995）

『清史稿』第四十二册（中華書局 1977）

『中国大百科全书 军事 1』（中国大百科全书出版社 1989）